フランツ・シューベルト

（1797 年 － 1828 年）は、ロマン派を代表する作曲家であり、特に歌曲の作曲において多大な貢献をしました。彼は生涯で 600 曲以上の歌曲を作曲し、ピアノ伴奏と声の対話による詩的な表現を極めました。

《魔王》D328 (Erlkönig)

シューベルトの代表作の一つであり、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテの詩に基づいた作品です。**魔王**は、父親が病気の息子を馬に乗せて急いで帰宅する中、息子が魔王に誘惑されるという緊張感溢れる物語です。音楽的には、馬の駆け足を模した急速な三連符のピアノ伴奏が印象的で、父、息子、魔王、ナレーターの 4 つの声を一人の歌手が演じ分けます。それぞれのキャラクターに異なる音楽的な色彩を与えることで、劇的な対話を展開しています。

《野ばら》D257 (Heidenröslein)

ゲーテの詩に基づいた、もう一つの有名な歌曲です。野ばらを摘もうとする若者と、その野ばらとのやりとりが描かれています。旋律は非常にシンプルで、シューベルトの特徴的な明快で透明な音楽が表現されています。軽快なリズムと優雅なメロディーが、詩の素朴な美しさを引き立てています。

《ます》D550 (Die Forelle)

クリスティアン・フリードリヒ・ダニエル・シューバルトの詩を基にしたこの作品は、ピアノの伴奏が跳ねるようなリズムで、川で泳ぐますの動きを表現しています。歌曲は、ますを釣ろうとする漁師と、その運命を物語る詩と音楽で　進行します。伴奏と声部が一体となり、物語を生き生きと表現しています。

《冬の旅》D911 (Winterreise)

ヴィルヘルム・ミュラーの詩に基づく連作歌曲集の一つで、24 曲からなるこの作品は、シューベルトの晩年に書かれた深遠な作品です。失恋した男が冬の荒涼とした風景を彷徨うという内容で、孤独や絶望、内面的な苦しみが表現されています。音楽的には、簡素な旋律の中に深い感情が込められており、ピアノ伴奏も感情的な彩りを加えています。「菩提樹」や「辻音楽師」といった曲が特に有名です。

《美しき水車小屋の娘》D795 (Die schöne Müllerin)

こちらもヴィルヘルム・ミュラーの詩をもとにした連作歌曲で、20 曲からなります。若い水車工が水車小屋で恋に落ちるが、その恋は報われず、やがて絶望して命を絶つという悲劇的な物語です。シューベルトは、情景描写や感情表現に優れた音楽を作り上げており、「さすらい」や「小川の子守唄」などが特に有名です。

《セレナーデ》D957 (Ständchen)

シューベルトの死後に出版された歌曲集《白鳥の歌》D957 の中の一曲で、愛する人への切ない思いを歌った優美な作品です。ピアノ伴奏は軽やかで流れるようなリズムを持ち、歌声は抑えた情熱と静かな哀愁が漂っています。この曲はシューベルトの中でも特に人気の高い歌曲です。

《アヴェ・マリア》D839

シューベルトの《アヴェ・マリア》は、ウォルター・スコットの長詩『湖上の美人』の中の一節をもとに作曲されたもので、原詩はラテン語の祈りの文句ではなく、神に祈る内容です。ピアノ伴奏は柔らかく、敬虔で穏やかな旋律が特徴的で、後にラテン語の歌詞で有名となりました。

《さすらい人》D489 (Der Wanderer)

ゲオルク・フィリップ・シュミットの詩によるこの歌曲は、孤独な旅人が心の安らぎを求めて彷徨う様子を描いています。歌とピアノが一体となり、絶望と希望の狭間で揺れる心情が表現されています。このテーマは、後にシューベルトの「さすらい人幻想曲」D760 にも影響を与えました。

《夜と夢》D827 (Nacht und Träume)

マティアス・クラウディウスの詩に基づいたこの歌曲は、静かな夜の中で夢を待ちわびるという詩的な内容です。ピアノ伴奏は非常に静かで、夜の静寂を表現し、歌声は夢への憧れを繊細に描き出しています。

《グレートヒェン・アム・シュピネ》D118 (Gretchen am Spinnrade)

ゲーテの『ファウスト』に基づくこの歌曲は、糸車を回しながらファウストへの恋に悩むグレートヒェンの心情を描いた作品です。ピアノ伴奏が糸車の動きを表現し、歌

声は彼女の動揺や焦燥感を表現しています。シューベルトの ドラマティックな音楽表現が光る名作です。

シューベルトの歌曲は、単なる歌とピアノの伴奏ではなく、両者が一体となって詩の世界を鮮やかに描き出す点が特筆されます。彼の作品は、詩の感情や情景を音楽で巧みに表現することで、リートの新たな次元を切り開いたと言えます。